

5. $^{201}\text{TlCl}$ を用いた甲状腺シンチグラムについて (その1)

竹内 昭 古賀 佑彦
(名衛大・放)
岩田 重信 江崎 俊夫
(同・耳)
鳥飼 勝隆
(同・内)
笠原 文雄 佐野 東谷
(常滑市民・放)

$^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ を用いた甲状腺シンチグラムで、欠損像を呈した4例に、 $^{201}\text{TlCl}$ 2 mCi を静注し、その直後よりスキャナーにてスキャンし、その後シンチカメラで撮像した。4例全例に、 $^{99\text{m}}\text{Tc}$ の欠損部に ^{201}Tl の著明な集積像が認められた。そのうち、2例は、手術により、follicular adenomaであった。1例は $5 \times 6 \times 6\text{cm}$ の球形の腫瘍であり、他の1例は、 $1 \times 2 \times 1\text{cm}$ の楕円形、 $1 \times 2 \times 2\text{cm}$ の円形および $2 \times 2 \times 2\text{cm}$ の球形の3個の腫瘍が認められた。シンチ像からは、この3個を認めることはできなかったが、甲状腺内の腫瘍の部位を確定するには、きわめて、有用であった。また、 $^{99\text{m}}\text{TcO}_4^-$ での欠損像の大きさと比して、外部より触知せる腫瘍の大きさと $^{201}\text{TlCl}$ によるスキャン像の大きさは、より正確に一致した。 $^{201}\text{TlCl}$ を用いる場合、撮像は、静注後、10分以内がよいという印象をうけた。欠損部($^{99\text{m}}\text{Tc}$)に ^{201}Tl が集積するメカニズムについては、不明であり今後の検討が必要である。

6. Tritab, Tetratabによる甲状腺機能検査法について

分校 久志 久田 欣一
(金大・核)
松平 正道 松本 進
清水 満 山田 正人
(同アイソトープ部)

血中 TBG 飽和度測定 ($^{125}\text{I}-\text{T}_3$ 摂取試験) や

CPBA 法による T_4 測定では従来レジンやイオン交換樹脂による未結合ホルモン分離法が行なわれてきたが、今回シリケート吸着剤を用いた Tritab, Tetratab の試用機会を得たので基礎的、臨床的検討を行ない、併せて T_7 値の検討を行なった。

本法ではインキュベーション時間が10分(Tritab (T3R)) 30分(Tetratab (T4R))と短かく、両者を同時測定しても1~1.5時間で全操作が終了できる。インキュベーション時間の影響はT3Rでほとんどなく、T4Rでも比較的少ない。再現性はアッセイ内、アッセイ間で1.5%, 11.6% (T3R), 7.7%, 7.7% (T4R)と良好であり、回収率は平均98.9%であった。測定者間の再現性、相関も良好であった。正常値は27~43% (T3R), 4~13 $\mu\text{g}\%$ (T4R)であり、これより求めたT7R値は1.0~5.7であった。トリオソルブ、レゾマツ T_4 , T_7 値との相関はそれぞれ0.88, 0.93, 0.93であった。以上の正常値による最終臨床診断との一致率は75.7% (T3R), 93.8% (T4R), 95.0% (T7R)とT7R値が最も良好で、臨床使用の際はT3R, T4Rの両者の併用測定によるT7R値の算出が有用である。

7. レジンストリップ法による T_3 RIA の使用経験

分校 久志 久田 欣一
(金大・核)

T_3 の測定は preclinical hyperthyroidism, T_3 thyrotoxicosis, hyperthyroidism の診断や治療経過の観察には欠くことのできないものである。われわれはこれまでデキストランチャコール法による T_3 RIA を行なってきたが、今回レジンストリップ法による T_3 RIA キットの試用機会を得たのでその基礎的検討と臨床例の結果について報告する。

測定条件では第一インキュベーションは温度、時間共にほとんどバウンド率に影響なく第二インキュベーションで軽度の時間的变化がみられた。 T_4 との交叉性は0~6 ng/ml の測定範囲内では